

山と博物館

第45巻 第3号 2000年3月25日

市立大町山岳博物館



「月下山嶺」剣御前にて

撮影 大石高志

光と山

武田 武

高校一年のとき、今でも続いている全校登山で連華岳に登った。記念すべき第一回の全校登山だった。六月というのに、半分雪に埋もれた大沢小屋の生活は、不便極まりなかったが、それさえ樂しかった。

針ノ木岳から連華岳に続く、まぶしく光る残雪の稜線は、少年の心をすっかり魅了した。この登山が、まさか私をヒマラヤをはじめ、世界の高峰にまで行かせ、今なお山登りを続ける人生の出発点にならうとは思いもよらなかつた。

魅せられた、光る雪稜のたたずまいは半世紀を過ぎたいまも、鮮明に網膜と脳裏に焼きついている。長い山歩きを振り返つてみると、不思議に、山と光景がたくさん蘇つてくる。

「御来光」 山歩きをはじめた頃、里では見ることのできない、高山での御来光の神秘にふれなんと、憑かれたようしていくつかの山に登つた。頂で御来光に逢うために、夜半にキャンテラとか、アセレンガスを灯して歩いたこともよくあつた。雨の日や霧のなかでも懐中電灯の光よりも遠くまで照らしてくれるガス灯を愛用した。懐中電灯が、簡単に入手できない頃でもあつたし、電池の寿命も、いまのリチュウム電池と比較すると、極端に短かつたり、高価なこともあり、なかなか買うことができなかつた。アセレンの独特な匂いと妖しげに揺れる光が懐かしい。

暗い、岩山を登つていくと、ときどき前を登つて行く人の足元から、煙草に火を付けることができるかと思うような火花が散る。ナーベル（戦前から昭和三〇年代前半まで一般に使用されていた、靴底や縁に鉛を打った登山靴）が岩に激しく当たり、小さな練香花火のような光を放つ。

高度を増して行くとともに、星の数もおおくなり輝きも増して大きくなる。星が手に届きそうなくらいに近付いてくる。東の中空に一種異様な、よわい光の筋がはしる。間もなく御来光の瞬間かと胸がときめく。

自然の美象は、一刻の休みもなく移ろう。光は、競い合う山嶺の高い順に、頂から頂へそして彩りを変えながら、谷間へと落ちて行く。空の雲も呼応して、その美しき瞬間は、まさに息をのむ間もなく一刻一刻と変転してゆく。色即是空、空即是色とはまさにこのことだらうか。

「ブロッケンの妖怪」 初めてブロッケン（ドイツ中部、ハルツ山脈のブロッケン山に多く見られたことからこの名がついた）に会ったときの震えるような感動は、古い昔の事だけれど、忘れることが出来ない大切な美しい想いでのひとつである。

赤い大きな太陽が沈む間際、反対側の霧の中に、不思議な幻影が浮かんでいる。手足をうがせば幻影もまた全く同じ動作をする。しかも幻影の周囲には、美しい虹の輪が光背を頂いているようだ。山のもつ、不思議な光輝に、驚嘆と神秘感に打たれた。

二ホンカモシカの呼び名と語源

—百六十三種の分類—(完結編)①

北村嘉寶

本誌等二五卷第五号(一九八〇年)、第二六卷第八号(一九八一年)で、カモシカの呼び名、一〇二種の語源を、また第二七卷第五号で、続編として時代別の変遷というテーマで、通算一〇六種の呼び名を紹介した。

今回は、その後収集したもの、既報の訂正、補遺、

文献名、分布地域名等を加え、改めて完結編として一六三種の呼び名を紹介する。呼び名には「二語形のものが多いので、分類に当たっては主語源と思われるものと関係項目に掲載した。

なお各項の末尾に記入した県名は、呼び名の分布県で、「」は市・都・地方名・山岳名である。また、仔以外はすべて成獣の呼び名である。

○語源による系統別の呼び名

1、ダキホラカシ(ダキハラカス)

ダキとは崖、ホラカシ(ス)とは落とすことをいい、方言を組み合わせた隠語。かつてはカモシカ獵法のひとつとした、獵犬等を使つて崖の上に追い詰めると、カモシカは足を滑らせて転落死したのを捕らえていたことを語源としている。宮崎(西臼杵)

(1)樋口信義「市房の自然」(自費出版、一九七八年)

2、アイジン(エジン)

アイ(エ)とは雪崩のことと、雪崩に打ち倒された夫(カモシカ)をさす隠語。新潟(北蒲原)

(2)高橋文太郎「東日本に於ける狩猟者とその狩猟」(山岳) (日本山岳会、一九三七年)

3、バイマタ
カモシカ獵の一方法。追い取りのボイと、狩猟用語の組み合わせによるマタギ言葉。

二、既系統・梅系統の呼び名

(二) 鮎系統

上代の文献に初登場したわが国最初の呼び名で、當時毛皮の敷物を「毛席」と呼んでおり、よい敷物になるシシ(宍)の意で名付けたもの。長野(小県)・京都(船井)・三重(多気)

(7)舍人親王撰「日本書紀」(七二〇年)

〔岩船・北蒲原〕
獵を意味するマタギという言葉と組み合わせて、ボイマタギとし、それがボイマタギ・バイマタに転訛したものと思われる。新潟

文献(2)に同じ。

4、クラマキ

クラ(岩場・岩壁)には、カモシカが多く集まるので、巻き狩り(四方から遠巻きにして獸を捕らえる方法)で捕らえたことから名付けたマタギ言葉である。

地域(県)により「才仔や三才仔をいい、四年目のものもクラマキと呼んでいた。

○成歎(新潟(岩船)・長野(大町))
(3)藤木九三・川崎隆章編「マタギ部落訪問」

〔登山全書II〕(一九五〇年)
○二才仔(山形(西置賜)・新潟(岩船))

○三才仔(秋田(山本)・富山(中新川))
(4)〔富山県史(民俗編)〕(一九七三年)

○四年目(長野(大町))
(5)千葉彬司「カモシカ」「山と博物館」(一九六九年)

注: 一年目は仔でなく成獣とする。

5、カングラ

カングラは寒中の寒、クラは岩クラのクラで、カモシカを寒中に捕るので、両方を組み合わせてカングラ→カングラと呼んだもの。カモシカの肉もカングラという。群馬(利根)

(6)〔町誌みなかみ〕(町誌みなかみ編纂委員会編、一九六五年)

○遠藤元理「本草辨疑」(一六一五年)

9、カモ

カモシカの毛皮が氷(敷物)になることからカモと呼んだのが、最初の語源であるが、近代になると(1)角の形状を鏡に見立てて名付けた「カマ」が「カモ」に訛ったものとされる。〔2〕禁獸を食用にするため、鴨(下略)などされたとするもの、〔3〕カモシカの語である。埼玉(秩父)・神奈川(足柄上)・山梨(大月)・長野(岡谷)・京都(船井・北桑田)

(1)安部真貞・出雲広真「大同類聚方」(一八二七年)

7、カマシ
「カマシシ」あるいは「カマシカ」の下略称と考えられるが、かつての標準語である。分布地域を明記したもののがないが、文献の時代を考えると、京都を中心とした範囲であったと推定される。

(8)深根輔仁「本草和名 下巻」(九一八年)
〔8〕安部真貞・出雲広真「大同類聚方」(一八二七年)

8、カマシカ
「毛席」と鹿(カモシカを鹿の同類と考えていた)とを組み合わせた呼び名で、近世の標準語のひとつである。一説によると、カモシカは鎌のようにもうすぐ、やせて切り立つた岩石のある峰に棲むことからこの名ありと

している。京都を中心に広まっていたと思われる。

(9)人見必大「本朝食鑑」(一六九七年)
ここで、現代の標準語をなっているカモシカといふ呼称について述べておく。この呼称は、昭和九年に天然記念物、昭和三十年に特別天然記念物に指定されて以来、全国的に定着してきた標準語である。カモシカという名前が、公文書に初めて採用されたのは、明治二五(一八九二)年に公布された「狩獵規則」(農務省)である。

和名は「ニホンカモシカ」で通常、カモシカと言っているのは略称である。カモシカの語源は、毛が氷になるシカというところから

一方、キラという呼び名は、ケラの「ケ」が、【キ】と発音されたものであるが、ケとキは

一方で普通関係にある。ケラの方には、確かに言葉もあり、またケラとキラの分布地方は同一ゆえ、ケラに含めた。

○ケラ(青森(西津軽・南津軽)・秋田(北

秋田・仙北】・岩手【和賀】・新潟【北蒲原】

○菅江真澄【布伝能麻透万珂】・真澄遊覧記】(一八二一年)

○キラ・秋田【北秋田・仙北】

○早川孝太郎【阿仁・マタギの山詞その他】

【方言】(一九三七年)

13、ケラナ(ケナラ)

「ケラ」と同義語のマタギ言葉であり、ナを接尾語にしたマタギ独特の造語法のひとつである。なお、ケナラと報告した文献もあるが、誤植か、あるいはカラダ(体)のことをカダラと発音する類例もあるので、ケラナと同一に扱うこととした。秋田【北秋田・仙北・由利】・岩手【和賀】

15、武藤鉄城【秋田のマタギに就て】『民俗学』(一九三三年)

14、ケラシシ

「ケラ」と、シシ(宍)とを組み合わせたマタギ言葉。青森・岩手

17、二ク

古くからカモシカの皮は、海(敷物)として利用されてきたことから生れた呼称で、当時の標準語である。近年になると、(1) 獣肉の二ク。(2) 怒ったときの憎々しい面つき。(3) 捕獲したカモシカを売ると、二工分(二日分)の日当になることなどから名付けたとする説があるが、海が元祖である。

また二クの二にアクセントがあるのが、この呼び名の特徴である。二ク系統の呼び名は、アオ系統の呼び名と東西対立分布をしており、西日本(糸魚川と浜名湖を結ぶ線より西側)に広く分布している。静岡【周智】・山梨【南巨摩】・長野【上伊那・西筑摩・飯田・下高井・北安曇・諏訪】・石川【白山山系】・福井【敦賀】・滋賀【甲賀】・三重【三重・北牟婁・多気】・奈良【吉野】・和歌山【日高・東牟婁】・徳島【愛媛】・高知【中央山地】・福岡【田上座郡】・宮崎【西臼杵・東臼杵・西諸県・東諸県】・大分【宮崎】・大分【大萌山・傾山・祖母山】・熊本【八代】・岐阜【石津】

18、ニクシカ

古くから食用になる獸は、宍あるいは肉として呼ばれてきたが、カモシカも食肉獸ゆえ、シシと言っていた。地域によって方言または、マタギ語となっている。秋田【北秋田・仙北・鹿角】・岩手【岩手】・宮城【名取・白石】・福島【南会津】・新潟【北魚沼】・富山【中新川】・長野【西筑摩】・岐阜【大野・吉城】

20、ニクノシシ

二クシシと同義語で、かつては方言であったが、近年では隠語の性格が強い。岐阜【群上・益田】・宮崎【東白杵】・大分【宮崎・祖母山・傾山】

21、シシ

古くから食用になる獸は、宍あるいは肉として呼ばれてきたが、カモシカも食肉獸ゆえ、シシと言っていた。地域によって方言または、マタギ語となっている。秋田【北秋田・仙北・鹿角】・岩手【岩手】・宮城【名取・白石】・福島【南会津】・新潟【北魚沼】・富山【中新川】・長野【西筑摩】・岐阜【大野・吉城】

22、ニクボーズ(ニクボウズ)

肉がうまい坊やという意の隠語(愛称)。

23、ニクメ

ニクメの呼び名に、接尾語の【メ】をつけて、ニクメと呼んだ隠語(蔑称)。地方によっては動物名にメをつけて、牛メ、馬メ、蛇メ、鳥メなどと呼んでいる所がある。石川【石川】・新潟【船井・北桑田】・滋賀【高島】・富山【中川】

24、ニクバカ

熊や鹿など他の獸に比べて、はるかに捕らえやすい、馬鹿な獸(宍・肉)という意の隠語(蔑称)である。大分【南海部】

25、ニクンボウ(ニクンボ)

「ニクボウズ」と同義語で隠語(愛称)。

26、カベ

カベとは、山が屏のようにならんと直立した絶壁状態の場所をいうが、カモシカはこのような場所に棲むので、最初からカベと呼んだ地域と、カベシンのシンを省略してシシと呼んだ地域とがある。岩手【南部地方】・岐阜【大野・吉城】

27、カベシシ

「カベ」と同義語で、カベに棲むシンという方言。富山【南砺波】・岐阜【大野】・石川【石川・美能】・福井【立石半島】

28、カベトリ

カベ(岩壁)に棲み、岩場を鳥のように身軽に跳ぶことから名付けた方言。岩手【南

19、ニクシシ

海(毛皮・敷物)になるシンという方言。

20、ニクバカ

熊や鹿など他の獸に比べて、はるかに捕らえやすい、馬鹿な獸(宍・肉)という意の隠語(蔑称)である。大分【南海部】

21、千葉徳爾【狩獵伝承研究】(風間書房、一九六九年)

22、【美濃国之内産物】「加越能三洲郡方産物帳」(一七〇〇年代)

23、【西置賜】・宮城【白石】・福島【南会津】・新潟【北魚沼】

24、【篠村浩】「南会津熊狩の話」『旅と伝記9(6)』(三元社、一九三六年)

25、【柳田國男】「分類山村語彙」(信濃教育会、一九四一年)

26、【篠田弘賢】「古今要覽編」(一八二二一八四年)

27、【川口孫治郎】「飛驒の白川村」(往「書店、一九三四年)

28、【小野職博】「観文獻譜」(一八〇七年)

献は22に同じ。

16、コシマケ

カモシカの毛皮を、保温のため、体に纏つたことから、腰巻きコシマケと呼んだマタギ言葉であるが、福島県南会津地方では、カモシカの仔も、コシマケと呼んでいる。また、

17、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

18、【小野職博】「観文獻譜」(一八〇七年)

19、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

20、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

21、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

22、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

23、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

24、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

25、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

26、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

27、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

28、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

29、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

30、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

31、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

32、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

33、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

34、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

35、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

36、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

37、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

38、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

39、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

40、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

41、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

42、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

43、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

44、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

45、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

46、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

47、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

48、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

49、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

50、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

51、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

52、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

53、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

54、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

55、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

56、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

57、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

58、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

59、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

60、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

61、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

62、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

63、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

64、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

65、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

66、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

67、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

68、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

69、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

70、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

71、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

72、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

73、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

74、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

75、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

76、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

77、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

78、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

79、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

80、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

81、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

82、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

83、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

84、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

85、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

86、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

87、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

88、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

89、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

90、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

91、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

92、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

93、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

94、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

95、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

96、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

97、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

98、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

99、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

100、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

101、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

102、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

103、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

104、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

105、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

106、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

107、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

108、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

109、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

110、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

111、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

112、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

113、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

114、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

115、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

116、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

117、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

118、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

119、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

120、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

121、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

122、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

123、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

124、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

125、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

126、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

127、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

128、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

129、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

130、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

131、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

132、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

133、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

134、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

135、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

136、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

137、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

138、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

139、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

140、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

141、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

142、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

143、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

144、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

145、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

146、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

147、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

148、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

149、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

150、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

151、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

152、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

153、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

154、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

155、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

156、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

157、【高橋文太郎】「山岳語彙叢書」(一九三八年)

158、【高橋文太郎】「山岳語

(二) 倉系統

29、クラ

カモシカは、屹立している岩場や鞍部（峯つづきの低い所）などに棲んでいること、また皮が馬の鞍敷（付属品）に使っていることなどから呼んだマタギ言葉である。福島・群馬（利根）・長野（上水内）文献②に同じ。

30、ヒクラシシ

ヒクラ（岩壁）に棲むシシの意で方言。岐阜（大野・吉城）文献②に同じ。

31、クラシシ

クラを巻いて走るシシという意のほか、ヒクラシシ→クラシシとして残った方言。山形（西置賜）・福島（南会津）・群馬（利根）、栃木（日光・奈須・塙谷）・新潟（岩船・耶馬・北魚沼・中蒲原）・山梨・長野（上伊那・下伊那・大町・西筑摩・南安曇・北安曇・上水内・下高井）・富山（立山）・岐阜（揖斐・恵那・大野・吉城）・石川（石川・福井（大野）・三重（飯南）・奈良（吉野）・和歌山（紀北地方）・愛媛（石槌山・徳島）市江三郎右衛門「信濃国高遠領産物帳・享保・元文諸国産物帳」（一七三五年）

32、クラシ

クラシシ・クラシカの下省略で方言。福島・群馬（利根）・長野（西筑摩）

③山岸弥平「博物図」（一八七六年）

33、クラシカ

クラに棲んでいるシカの意の方言で、イワシカと同義語である。群馬（利根）・長野（上伊那）

②岩科小一郎「山岳語彙」（体育評論社、

一九四〇年

34、クランド

ドは漢字で驚、愚かとか、にぶいといった意味があり、クラにいる愚かなケモノという意の隠語。クラとドの間に「ン」を入れたのは、語呂の関係であろう。岐阜（吉城）

③「上宝村誌」（岐阜県吉城郡上宝村、一九四三年）

35、クラタチ

マタギ言葉で二才仔をいう。カモシカの仔は親離れして独立すると、しばしば岩クラの上に立って、凝視姿勢をとることが多いので、クラ立チと呼んだもの。青森（下北）

④「下北半島のニホンカモシカ」（下北半島ニホンカモシカ調査会、一九八〇年）

36、クランボウ（クランボー）

クラにいる愛嬌のある可愛い奴という意の隠語（愛称）。ボウ（ボー）は醉坊、吝坊などの接尾語で、クラと組み合わせてクラボウとして、それがクランボウ（ボー）となつたもの。栃木（日光地方）・長野（岡谷・茅野・諏訪）・岐阜（恵那）

⑤町田立穂「又鬼部落の熊狩り」（全獣112・3）（全日本狩猟俱楽部、一九三六年）

37、クラップー

クラと、奴という意のブーとを組み合わせた方言で、クラにいる奴という意味の呼び名である。群馬県水上町藤原地域では、土質の悪い土地のことを野ブー、大うそつきや、大法螺吹きのことを野テッパーなどといい、ブーは奴とか、ものをさす方言となつていて。群馬（利根）

⑥安達成之・川崎隆章編「藤原風土記」（宝川温泉汎泉閣、一九六三年）語源は吉野秀市氏の書簡による。

38、クラップーに、指小辞のコをつけた隠語（愛称）。新潟（北魚沼）

39、クラッポー

クラと、ボー（棲むもの、醜いものの意）とを組み合わせ、岩場で棲んでいるものという意の隠語。福島（南会津）

⑦「南会津南郷の民俗」（会津民俗研究会、一九七一年）

40、ヤマシ

山に棲んでいる宍という意で、古代の標準語のひとつ。分布地域は当時の都、奈良を中心広まつていつたと思われるが、今日では長野県に残つているだけである。長野（小県・上田）・奈良

41、ヤマノシ

「ヤマシシ」と同義語で、奈良時代の標準語。茨城

⑧「常陸国風土記」（七二〇年以降）

42、ヤマヒヅジ

「山羊」の訓読みでヤマヒヅジ、山にいる羊によく似た獸の意で、標準語。近世の文献に出現するが、分布地域は明らかではない。

⑨「林道春一改正増補多識編」（一六三〇年）

43、ヤマニク

山肉の意と考えられる隠語である。奈良

44、ゴーラ

「ゴーラトンガリ」の下略称で、マタギ言葉となつていて。新潟（中蒲原）

⑩「総合日本民俗語彙」（民俗学研究所、一九五五）（一九五六）

45、ヤマウシ

山の牛と名付けた隠語。三重（熊野）辻本力太郎氏より聽取。

46、サンヨウ

「山羊」の音よみによる呼び名であるが、分布地域は不明である。深根輔仁「大和本草（下）」（一九一八年）によると、「零羊角（山羊）」と記録しているが、振り仮名がないので呼び方は定かではないが一応、呼び名として記録する。

⑪稗田董平「羚羊考」（高志人社、一九六二年）

47、ゴーラトンガリ

生息場所をいうゴーラ及びトンガリとを組み合わせたマタギ言葉で、ゴーラとは岩のゴロゴロした場所をいい、トンガリは笑んがりで、山の陥しさを意味している。新潟（中蒲原）

⑫笠原藤七「川内山とその周辺」（自費出版、一九六五年）

48、ゴーラ

「ゴーラトンガリ」の下略称で、マタギ言葉となつていて。新潟（中蒲原）

文献②に同じ。

49、ゴーラ

「ゴーラトンガリ」の下略称で、マタギ言葉となつていて。新潟（中蒲原）

文献②に同じ。

50、ゴーラ

（三重県在住）

▼本文に関する問合せ先
〒五十九一三四〇三 三重県北牟婁郡海山町上里三七六
電話 〇五九七三一六一三三四
市立 大町・山岳博物館

51、ゴーラ

（三重県在住）

二〇〇〇年三月二十五日発行

発行 〒五十九一三四〇三 三重県北牟婁郡海山町八〇五六一

電話 〇五九七三一六一三三四

市立 大町・山岳博物館

TEL 〇二六一三三一〇二二一

FAX 〇二六一三三一〇二二一

印 刷 奥 村 印 刷

郵便振替口座番号〇〇五四〇一七一三三九三